幼稚園における保護者成長支援システムの構築に関する研究
—保護者の成長過程を組み入れた教育課程の編成—

内藤知美（児童学科・助教授）
杉本裕子（初等教育学科・講師）

1．研究の目的

近年、子育て支援は、国の重要課題であり、保育所での特別保育や幼稚園の預かり保育、子育て支援センターの設立など多くの施策が行われている。しかし、急激に行われたそれらの施策の多くは、子育てに対する保護者の役割軽減への方向性を選び、子どもの成長の基本となる乳幼児期の「保育力」の質的向上を保障するにはいたっていない。

本研究は、育児負担を減らす方向のみではなく、「乳幼児期の空洞化」といわれる子どもの危機的状況を前にして、保育力を高めるために保護者の成長支援を行っていくことが必要であるという立場にたち、保護者の成長支援システムの構築を研究するものである。

実際に保育の場で子どもと共に過ごす時間の多い幼稚園の保護者に焦点をあて、3年保育における子どもの発達過程と連動した保護者の成長支援のあり方について検討する。

2．研究計画（平成18年度・19年度・20年度）

（1）①保育関係文献資料・政府刊行物による日本の保護者支援システムの検討
②幼稚園における保護者の成長プロセスに関するアンケート調査及び分析
③幼稚園における保護者の保育参加場面のビデオ分析による検討

（2）①当該分野先進研究国であるカナダ・ニュージーランド等の保護者支援システムとの比較検討
②アンケート対象の保護者に対する継続アンケート調査の実施・分析
③ビデオ分析対象者に対する保育参加場面の継続検討

（3）①アンケート対象の保護者に対する継続アンケート調査の実施・分析
②ビデオ分析対象者に対する保育参加場面の継続検討
③研究のまとめ（保護者の成長過程を組み入れた幼稚園教育課程の編成）

3．平成18年度研究成果（中間報告）および今後の課題

平成18年度実施した内容は以下である。① 先行研究の整理。② 3歳児保護者へのアンケートを2回実施。時期は、入園前および平成18年12月。③ 具体的子育て支援を実施するため、幼稚園の年間指導計画の中に「予想される保護者の姿」「保護者との連携及び留意点」欄を設け、18年度末に実態とのズレを検証。④ 子育てに関する懇談会など保護者成長支援の場の設定。⑤ 保育参加場面のビデオ分析（平成19年2月実施予定）である。

当該分野の先行研究として、子育て支援活動で先駆的な役割を果たすカナダのファミリーサポートプログラムあるいはファミリーリソースプログラムの整理を行った。

まず基本的概念として、子育てとは一生涯をかけて学ぶものであるという立場にたつ。(= Parenting is a life long learning process) すなわち、子育て支援研究はプロセス研究として捉えられるものであり、本研究が「成長過程」を捉える立場と一致する。そして、カナダにおけるファミリーサポートでは、「子どもがいるからといって、必ずしも親が子育ての専門家ではなく、increase a sense of their own confidence as a parentとしての「自信」をはぐくむことである。

カナダの支援プログラムが提供するのは、次の6点である。① Time and space (時間と場所) ・・・親たちは子育てや家庭について考える場所と時間が与えられ、また子どもたちや地域のほかの人たちとの人間関係において、新たな選択肢が与えられる。② Information (情報) ・・・豊富な知識をもつスタッフが親たちのニーズを捉え、信頼できる研究や経験に基づく新たな知識を紹介したりして、その選択肢を広げる手助けをする。③ New skills (新しい技能・技術) ・・・親たちはスタッフや他の利用者たちの助けを借りて新しいスキルを身につけることができる④ Relief from isolation (孤立の予防) ・・・利用者で構成されたグループは、希望や不安、また涙と笑いを分かち合う安全で快適な場所を作り出す。理想的には、プログラムに参加しなくなっても地域の中で続く人間関係が作られる。⑤ Resources (資源) ・・・プログラムを利用することで、親たちは保育所や地域のイベント、安価な食料や衣類を購入できる場所まで、地域で得られる利用可能な資源を知ることができる。⑥ Referral (委託) ・・・家族の中にファミリーリソースプログラムでは扱っていない問題などが生じたときに、スタッフは地域の中のほかの専門家によるサービスやプログラムなどを紹介する。(関東学院大学2006 P8－25)

幼稚園の機能に着目した子育て支援の先行研究では、山口大学教育学部附属幼稚園の保護者サポートシステムを検証した。そこでは保護者の成長の中身として次の3点で捉えられている。① 子ども理解を深める② 保育理解を深める③ 保護者自身のあり方を考える。そして、3年間の保育参加の実態から保護者の成長支援の過程を捉えている。(友定2004 P12)

上記の先行研究の知見に学びつつも、著者らが行った関連研究で指摘したように、「親としての人格 (親資質) 的成長のモデルを明らかにし、それを達成できるよう支援していくことが、保育者が保育現場で行う支援のひとつであると考えてきた。(中略) 近年の代表的な研究の成果に加え、保育実践現場で実際に出会い、関わりあう母親達が、ひとりひとり独特な生活世界を生きる個々人であることに注目せざるを得ず、一定の人格的成長を定型的なモデルとして提示することにどのような意義があるか疑問」(入江他 2005 P70) であるという立場にたち、モデル化を志向する前に、幼稚園における親子の葛藤の内実に踏み込み、親資質の成長過程を捉えていきたい。

平成19年度以降、具体的には継続して次の課題に取り組んでいく。

先行研究の示唆から「幼稚園」の場の機能を有効に活かした「保護者成長支援」のあり方を定義・概念化していく。また保育現場で親子が経験している「葛藤」の中身の詳細を継続検討するとともに、その質的変化を検証する。3歳児の保護者へのアンケートやインタビューを行い、葛藤状況の原型として、「身体的発達」「集団生活への参加」「対人関係」に関することが上げられたが、幼稚園生活を過ごす中で「子どもの自我の成長に伴う変化を前に、子どもといかに関係を構築するかという保護者の葛藤」が見られた。従来の関係から新たな関係の変容が求められる際の不安が大きいことがわかる。新たな関係の必要性の理念的理解がいかに進むのか、また「身体的関わり」を含めて実際の保護者の保育場面にどのような変容を生むのかを継続検討

していく。保護者成長支援の機会を提供する点では、保育参加の行事後、保護者の感想や意見を収集した。その結果、各家庭としての意見を持ち発言の機会があればそれを表明する意思があること、幼稚園には家庭教育に関する様々な相談の機会や子育ての不安を保護者同士励まし合う場を求めており、特に異年齢の子どもをもつ保護者の交流が鍵になることが示唆された。幼稚園という場の機能をいかした保護者成長支援システムの構築を課題に、「場」のもつ役割を整理分析していくことが課題である。

本研究は、鎌倉女子大学学術研究所助成研究「幼稚園における保護者成長支援システムの構築に関する研究—保護者の成長過程を組み入れた教育課程の編成—」の平成18年度中間報告である。

引用・参考文献：

入江礼子、内藤知美、杉本裕子「乳幼児保育活動における親資質の育成支援」鎌倉女子大学学術研究所所報第5号（2005）

関東学院大学人間環境学部編「子育て支援特別講演会報告書」（2006）

友定啓子・山口大学教育学部附属幼稚園「もう一つの子育て支援　保護者サポートシステム」（フレーベル館　2004）